

ました。(七月二十六日)

五、「バレー部全国大会連続二年出場」

今年もベスト十六位進出。東京の駒沢体育館、北海道から九州まで、各県の選手と試合をしました。愛知県代表として燃えた四日間。(八月十五日)

六、「一人に一個のルーベ」

みんなルーベ(虫めがね)をもらってうれしそう。「ソニー教育資金」受賞 将来の科学者がたくさん出ることが期待されます。(十一月一日)

七、「勉強でも入賞続々」

入賞はスポーツだけではありません。統計グラフ、貯金箱、ポスター、習字、先生の教育論文、自作TPなど、続々と入賞しました。

八、「PTAの汗の結晶、総合遊具設置」

夢の遊具とでもいいますか。二年間資金を作ってくださって、中庭にできました。この遊具の愛称(ニックネーム)も子供たちから募集中。(三月十一日)

九、「学校だより上地」発行三年間

月刊継続発行三年を記録しました。学校と家庭のかけはし、保護者、学区、贈呈先の方の励ましが支えになっています。これからも感想などお寄せください。

十、「新しい家庭科室で給食試食会」

ピカピカの特別教室。好評でしたので来年度も企画します。ぜひご参加ください。(二月二十日)

三、教室の窓

一、大きな目を開けて歌おう

一年担任 松野 加代子

入学してから一週間ほどは緊張していた子どもたちも、次第に活発になり、いろいろな場面で自分を認めてもらいたがり、とてもにぎやかになってきました。

一日の生活の中に、「あさの歌」「さんすうの歌」「てあらいの歌」「かえりの歌」を取り入れました。が、歌うときには、みんな自分を認めてもらいたいあまりに、大声でどなりがちになってしまいました。私が「どの号車の声が大きいかな。」と言うとますますどなってしまい、顔が真っ赤です。一年生最初の「あさの歌」に、かわいい曲『あさ おきたん』をせっかく選んだのに困ってしまいました。それから、「大きな目を開けて歌おう。」と言ったり、「小鳥さんの声で歌おう。」と言ったりして歌うようにしました。今までどなっていた子も、かわいい声で歌うようになりました。歌い終わったら、「大きな目が開いていたよ。」とか、「かわいい声で歌えたね。」と言葉をかけています。目と目が合い、みんなにこにこしてくれます。私も負けずにこっと微笑み返します。こうして、一日が級訓『えがお』のように笑顔で始まります。

「さんすうの歌」は、多い、少ないをみつけるおまじないの歌です。

ひとつと	ひとつ	ひとつと	ひとつ	おおいほうが	のこる	のこったほうが	おおい
------	-----	------	-----	--------	-----	---------	-----

「てあらいの歌」は、手の洗い方の順番を歌にしたものです。手洗いをしている子はもちろん、後ろに並んでいる子たちも歌

うので、流し場がとてもぎやかになります。

水つけて	せっけんつけて	手のひら	手のひら	きゅきゅきゅ	
手の甲	手の甲	きゅきゅきゅ	指の間	指の間	きゅきゅきゅ
指先	指先	きゅきゅきゅ	手首	手首	きゅきゅきゅ
せっけん	流して	お・し・ま・い			

私がある場で□ずさんだ歌ですが、子どもたちはすぐ覚えてくれました。

「かえりの歌」は、ジャンケンを取り入れた歌の『かもつれっしゅ』です。帰る支度ができると、列車に変身します。教室中を「シュ シュ シュ」と□ずさんで、走り回っています。だんだんと列車がつながり、チャンピオンが決まると、もうおおさわぎです。

かもつれっしゅ	シュシュシュ	急げ急げ	シュシュシュ	
今度の駅で	シュシュシュ	つもうよ	にもつ	ガッチャン

歌ったり、リズムに合わせて体を動かすことが大好きな子どもたちです。これからも、音楽を柱として笑顔いっぱい生活をしていきたいと思えます。

二、アンテナをのぼそう

二年担任 杉本 峰

「先生、あの子がねえ、変なことするよ。」

「あの子、じゃあ、分からないな。何ていう子。」

「知らない。」

二年三組の三十六人が、プレハブ教室でにぎやかに学習を始めて二か月が過ぎようとしています。さすがに、四月によくきかされた「あの子」という呼び方は、もう出てこなくなりました。お互いの顔も名前も覚え、クラス替えの戸惑いも解消したようです。

二年生の子供たちにとって、最初の一か月は、一年生の時とはまた違った意味での緊張感があったと思います。

二年生になって

四月五日(水)はれ

わたしは、二年生のへやにきてびっくりしました。夏はずいこと(クーラーつきなので)が、びっくりしました。もっとびっくりしたことは、クラスがめちやくちやにかわったことです。でも、すぐにおともだちがいっぱいできたので、とてもうれしかったよ。

帰りの会のときに、その日にあったこと、良かったことなどを子供たちに聞くと「○○君と友達になったよ」「私、もうほとんど名前覚えたよ。」と、友達作りについての報告をうれしそうにしてくれたものです。自分から話しかけることの苦手な

子にとっては、長い一か月だったかもしれません。『一人だけで、ぼつんとしている友達を作らないこと』が、春の遠足の目当てでもありました。

最近では、四月当初のような緊張感は無くなったものの、放課に遊ぶ仲間が決まってきて、「入れて。」と声をかけても、いつものメンバーでないとすぐに「いいよ。」と言ってもらえず、「先生、〇〇君たちが入れてくれないよ。」と訴えてくる結果になります。中には、「入れて。」が言えずに、まわりで見ている子もいます。

「みんな、おでこのところから、アンテナ出して。ビ、ビッと合図が来るからね。アンテナを引っ込めちゃいかんよ。友達、困ったな、という顔をしていたら助けてあげようね。」

と折に触れ話しています。帰りには、日直が、一生懸命に会を進行しようとしています。力のあり余っている子供たちは、遊ぶ約束をしたり、つつつきあってふざけたりして、ほとんどの子が気が付きません。仕方なく、私が大声を発します。

「ゴロゴロゴロゴロ……。」

「ドッスン。」

時々角を出す先生は、カミナリ役です。途中まで言うど、落ちるところは、子供達が言ってくれます。にこにこしながら言うところに、気を取り直し、帰りの会が始まるという具合です。

「牛乳やおかずをこぼしちゃったときにも、きつとみんなのアンテナに合図が来るよ。バリアを張っちゃいかんよ。」
そういうと、

「バリアアッ。」「バリア、バリア、バリア。」

大喜びで始めます。子供たちにかかるど、何でも遊びに早変わりです。そんな中で牛乳がこぼれたときに、さっと雑巾を持ってきてくれる子が、少しずつ増えてくるのを楽しみにしています。

三、人の心の温かさに触れて

三年担任 稲垣 たかみ

「今日は、どんなお話を読もうかなあ。」

「先生、怖いのがいいよ。女子が泣くようなやつ。」

「やだあ。面白いのがいい。」

四月から朝の会や授業の中でいろいろなお話の本を読んできました。子供たちはほんとうにお話を聞くのが大好きです。いつもはにぎやかな教室もこの時ばかりは静まり返り、前に集まって真剣に聞きます。

校長先生の創作童話『絵からぬけたトラとりゅう』を読んだ後、

「先生、トラの絵を見に行きたい。」

という、子供たちといっしょに早川博さんのお宅へ、トラのふすま絵を見に出かけました。

「すげえ。」

みんなトラの絵を見てびっくり。ほくもびっくり。今にもかみつきそうなくらい。

とび出すぐらいの顔だった。足も一番はやいぐらい。目もこわそう。細かいところま

でかいてある。ほくの絵とくらべると十ばいぐらいだった。目のはしっこが光ってい

たので、夜になると目が光って絵から出てくるみたいだった。(三年 和田 卓郎)

子供たちをやさしく、そして温かく迎えてくださったおじいさんやおばあさんたちでした。行き道でピカーッ、ゴロゴロッとかみなりに、

「トラの、絵を見に行くから、りゅうがおこつとるじゃない?。」

という子や、すぐ近くに落ちたかみなりの音にみんな震えていました。その恐ろしさは、早川家の人たちの温かさでいっぺんに消え、早川家の人たちが大好きになってしまいました。「日曜日にはぜひ遊びに来てください。」の言葉に大喜びです。

今日、久美ちゃんとみすずちゃんといっしょに早川さんの家に行きました。着いた時にしんぞうが「ドキドキドッキン」となりました。「ピンポン。」と久美ちゃんが鳴らしました。「はい。」と言っておじさんが出て来ました。「今日は、私たちは三年四組の川口と平本と小西です。」と言いました。「よく来たね。中へ入っておいで。」と言ってくれました。「おじゃまします。」・・・(三年 平本 雅絵)

早川家と三年四組との交流は一月を過ぎた今も続いています。トラの絵が見たいという母親の手を引き早川家へでかけたりいつもは引つ込み思案の女の子が二人で尋ねたり、お孫さんといっしょに遊んだり、たぎびのお手伝いをさせていただいたり、虫の観察をして帰ったり、早川家の人たちのご好意にすっかり甘えさせていただいています。

『絵からぬけだしたトラとりゅう』の発表会をするようになった時、

「早川さんにきてもらいたい。」「ぜったい来てほしいなあ。」
と、ほんとうに親しみをもった声が自然に出てきました。

一生懸命に案内状を書いたり、雨が降ると来られない早川さんのために、てるてるぼうずを作ったりする子供たちの姿を見ていると、たった一枚のトラの絵が繰り広げた、三年四組と早川さんとの交流の大きさを感じました。何回も訪ねる子供たちに、早川家の方たちがいつもこんな温かさまで与えてくださるとは夢にも思いませんでした。そして、早川さんに感謝し、これからもすてきな出会いをしていきたいなあ、と思うこのごろです。

四、大成功！新ジャガたつぷりの特製カレー

四年担任 田中 鉄也

上地っ子四年生が心待ちにした「大谷公園カレーの会」。

教室に入ると、子どもたちの熱気が伝わってくる。

「今日、必要な持ち物の点検は済みましたか。」

「はい。ばっちりだよ。」

予想通りの返事であった。この子どもたちの心意気が、前日の雨空をふきとばしたかのような好天気を迎えたスタート。

まずは、大切な材料の仕込みだ。もちろん主役は、上地農園で作ったジャガイモだ。ボールに水を汲んで、金たわしでこする。うまいものだ。短時間で、あつという間にジャガイモは裸にされてしまった。いよいよ、みずみずしいジャガイモに包丁が入れると、

「先生。ほら、見てよ。白いでんぶんがついとる」

と、わざわざ、その包丁を見せに来る子もいた。

「ああ、たまらん。」

どうやら難敵が待ち構えていたようだ。子どもたちは、たまねぎの皮をむいては手を休める。代わる代わるで、皮をむく。本当に、涙なくしては語れない光景になった。それでも、皮むきが済むと、見事な包丁さばきを披露してくれた。ここでの名人は、意外にも男の子。

「本気になれば、本当は男の方が、料理がうまいんだぞ。」

得意そうな声が聞こえてくる。ブツブツ、ゴツゴツの野菜を詰め込んで、予定より早く、仕込みが終わって、ニッコリ。

場所を変えて、大谷公園のキャンプ場。各クラスに、はそりが準備された。はそりに、切った材料を入れ、水を満たす。ここからは、火の係の出番だ。カレーの味も火加減しだい。大事な役目である。割箸がおがくず、薪と準備はOK！こわごとと、マッチの火を近づける。一発で着いた。火の周りを取り囲んだ一団が、うちわで風を送る。次から次へと、薪がくべられる。見事な共同作業。

「ぐつぐつ、ゴトゴト」

はその外にも、野菜が煮える音が聞こえるようになった。蓋を開けると、湯気の底から、ちょうどいい煮加減の野菜が顔をのぞかせた。栄養満点の肉も加わり、つばをゴックン。

もう待ったなし。カレーのルーを入れることになった。一かけ、また一かけ。ちぎっては、かき混ぜ、絶妙なとろ味に近づけていくのが見ものだ。適当な色がついたら、二組だけの特製カレー。みんなで持ち寄ったソース、ブイヨン、塩、にんにく、ブラック・ペパーが隠し味。少し甘そうだけど、おいしそうなカレーの出来上がり。

大谷の山に、上地っ子四年生の力いっぱい『ごほんの歌』が響き、カレーライスの香ばしいにおいが漂う。

「いただきます」

の声で、手作りのカレーライスに舌つつみをつ。青葉の匂いとみんなで食べる楽しさで、子どもたちの顔にも笑顔がこぼれる。お代わりに走る子どもの姿が、後を断たない。はそりのなかのカレーは、またたく間になくなってしまった。

お母さんの作ったものより、「ぐーん」とおいしかったです。

それは、あたりまえ。私たちがつくったジャガイモがたくさん

入っているからだ、と思います。

(四の二 新川 裕美)

カレーの会が行われました。私は、カレーはとくいです。その中でも、一番好きな物は、さい料を洗ってから、ほうちようで、

「サクサク、トントン」

と、切ることです。切っていると、いろいろな形ができて、おもしろいです。

じゃがいもや、にんじんを切り終わると、次は、なべに水を入れて、切った物をなべの中に入れます。だんだんやわらかくなってきたら、カレーのルーをなべの中に、

「ポッチャン、ポッチャン」

と、入れて、おたまでかき混ぜて、できあがり。というふうにしゅん番があります。カレーは、少しあまかったけど、おいしかったです。カレーの会があって、料理が大好きになりました。

もう一つ、四年生には、楽しみができました。それは、さつまいもを植えたので、秋にも大会が行われるそうです。また一つ、四年生の思い出がふえそうです。(四の二 塚本 晶子)



(4の2 柳瀬 志穂)

五、一粒のお米をきっかけにして

(五年 社会 『日本の農業 米作り』より)

五年担任 奥村 武文

「君たちのいつも食べているお米は、どこから買ってくるのかな。」

「スーパ―。」

「お米やさん。」

「親戚から送ってもらう。」

など、いろいろな答えが返ってきました。

「そのお米はどこでとれたんだろう。」

「米袋を見れば、どこでとれたか書いてあるよ。でも、もっと知りたいな。」

「学区のお米やさんに聞きに行つて調べてみようよ。」

意見が続いて出て、いつも自分たちが食べているお米の多くは、どこから送

られてくるのかを学区にあるお米やさん「オカリヨウ」に聞きに行くことにな

りました。

さっそくオカリヨウへ行つて見てくること、聞いてくることをノートに書きだしてみました。いざ考え出すと、いろいろなことが出てくるものです。その一方で、各家庭から米袋を持ってきてもらい、教室の後ろに掲示しました。

オカリヨウへの見学は、社長さんや社員のみなさんの優しい心づかいにより、大変有意義なものになりました。

「ぼくは、オカリヨウへ行つて入り口の俵を見たとき、とても大きくてこれがかつぐのは大変だなと思いました。店の中に入ると、社長さんや店員さんがいろいろなことを教えてくれました。秋田小町やササニシキ、コシヒカリなど多くの米があることが分かりました。社長さんに、どの地方からたくさん送られてくるのか聞いたら、北陸地方と東北地方が多いということが分かりました。ぼくは、東北地方の米作りについて調べてみようと思いました。」

「私は、先生が、みんなの食べている米はどこでとれたのかと聞いたときは、全然分かりませんでした。たぶん、愛知県の中の岡崎に近い所だと思いました。でも、みんなが家から米袋を持ってきてみると日本各地から送られてきていることが分かりました。特に、新潟県や秋田県、宮城県が多いことが分かりました。私は、どうして東北地方で米作りが盛んなのか、どうしておいしいのかを、米袋に書いてあった生産者の人に手紙を出して聞いてみました。そうしたら、一年間の米作りのスケジュールや苦労などを教えてくれました。おいしい米を作るために、自分の子供を育てるように、愛情をもって育てていることも分かりました。この愛情を持って育てるといことがとても大切だそうです。ほかには田の面積が広い、水がきれい、少しでも米がたくさん取れるように研究しているということも分かりました。」

子供たち全員、東北地方の米作りが盛んなことが分かってきたところで、資料を使って米作りの仕方を、B紙にまとめてみることにしました。代表的な農家、石山さん、西川さん、小野寺さんの三人を中心にまとめてみました。東北地方の米作りについて調べてみようという興味、関心が高まっている状態であったので、全員意欲的に取り組んでいきました。家族や家の作りの工夫、田畑の広さ、稲の品種改良など自分の調べてみたいことを中心にまとめていきました。いつも食べているお米をきっかけに見学学習を取り入れ、問題意識を連続させることによって、子供たちの興味・関心も高まり、楽しい学習を展開していくことが出来るようになりました。

六、『ドロシーの冒険』を通して

六年担任 高橋 由美子

「一番下の土台の者は、絶対に動くな。土台が一センチ動けば、一番上は三十センチぐらいゆれるんだ。」
「練習中にしゃべるな。自分たちでこの組立を作り上げるんだ、という気持ちを持つとう。」

五・六年生二九八名の中に、張りつめた空気が流れる。今年もまた、上地小恒例の組み立て体操の練習が始まった。各場面ごとに組立の要素が入れられるようなストーリー性のあるもの、そして、音楽性のある話として、鶴田秀幸先生から、『オズの魔法使い』が提案された。早速、全体構想(組み立て・ダンス指導)・音楽・ナレーション・衣装と先生たちの係が決められ、練習が始まった。

途中で五年生の山の学習があり、思うように練習がはかどらない。残された練習時間の中で、指導しなければならないことは山ほどあり、焦りを感じるようになった。しかし、こちらの焦りとは逆に、子供たちは中盤にきて中だるみをし始めた。

「上地の組立は、岡崎市内では評判だけれど、今年の組立は今までの中で最低だ。余分な動きが多すぎる。どうして、同じことを注意されるんだ。」

という、厳しい声も聞かれた。こんな言葉が繰り返されるうちに、子供たちの中にもぎつと、(先生たちに認めてもらえるような演技をしてやろう。)という気持ちがあつただろう。

いよいよ本番だけを残す最後の練習日、

「やるだけのことはやった。後はズボンに手をやったり、ごそごそしなければ満点だ。」・・・最後まで、この心配が付きまとう。

運動会当日、最後から二番目という悪条件の中で、『ドロシーの冒険』が始まった。しだいに子供たちの顔は、真剣な表情に変わっていく。五段の俵が全て完成！第一の難関突破。三年ぶりに復活した五段の塔もふらつくことなく完成！

「やったぞ。おまえたちはえらい。満点だ。」と、補助する渡辺先生の声。その声を聞いて、子供たちの顔はほころんだ。そして、何よりもエンディングまで、誰一人として余分な動きをする者がいなかったことがうれしい。最後の最後で期待に応えてくれた。自然に熱いものがこみあげてきた。

(みんなの気持ちがひとつになって、やろうと思えばできるじゃないか。途中で、よくぞハラハラさせてくれたものだ。)

やり終えた後の子供たちからも、

「先生、やったよ。自分でも満足だったよ。」

という喜びの声。ただ残念だったことは、ひたすら組立に集中してきた子たちにあの四人の主役が見せてくれた、表情豊かな演技を見せられなかったことだ。みんなが一人乱さず全体の美を作ってくれたからこそ、四人が生かされたのだということを知っていてほしいと思う。

ドロシーの冒険、満点、バンザイ！



3年ぶりに復活した五重の塔

ぼくはライオンの役に決まった。前々から、組立体操の主役がやりたいと思っていた。なぜなら、四年生のころのぼくは、暗いと言われ、五年生からイメージチェンジをした。そして、自分を生かすチャンスがほしいと思っていたからだ。役を決める時は、ぼくが一番で演技をした。とにかく無我夢中で、大きな動きをした。一生懸命やったから、これで落ちたら仕方がないと自分でも思った。

「ライオンの役、奈倉・・・。」

と呼ばれた時は、信じられない気持ちだった。組立の練習が始まった。ぼくたち四人は、ずっと自分たちで動きを考えていた。座って見ていることも多かった。

（こんなことなら、みんなと組立をやった方がいい。このままで予行演習ができるのだろうか。）

と思った。

衣装をつけると、気持ちもライオンのようになる。ただ、ぼくの衣装はよく目立つのか、小さい子がちよんとさわっては逃げていったり、

「あれ、インディアンじゃない。」
と言われたりした。

タラタラタラーという音楽が流れると、そんなにひやかされたことも忘れてしまった。

尚子先生に言われた、指を曲げ、とがったつめのように見せること・大きく大きく表現することだけを頭にいれて動いた。怪獣カリダスをやっつけるタイミングもびったりあった。ふだんの練習では、ぼくが通る時に笑ったりするけど、本番は雰囲気違った。目をつり上げたようにぼくをにらみつけ、力が入っていた。本物の怪獣のように感じて、逆に負けてしまいそうな気さえた。最後の力を振りしぼって、「ヤッター。」とかけ声をかけた。

カリダスが倒れた。よかった。そして、いよいよラストシーン。こわくもないのに足がふるえていた。

手を振りながら、指令台に向かって行くと、鶴田先生の目に涙が光っていた。ぼくは、『ドロシーの冒険』を忘れないだろう。



ドロシー（左）ときこり（右）



かかし（左）とライオン（右）

七、石ころの学習

一年担任 満本 妙子

「せんせい これで十かいめだよ。」

「ぼくが、大きい石もってきてあげるわ。」

子どもたちは、石置場と教室を何度も往復する。

「あせびっしよりになっちゃったよ。」

と上着を一枚脱いで、また石置場へ。

明日は、たくさんのお客さんを迎えるの研究授業。理科の石ころの学習を考えたのだが、校舎の増築工事で石置場の回りには、子どもたちが自由に活動できる場がない。

そこで、まず、石ころの学習は、石置場の引越しから始まった。大変な仕事であったが、子どもたちはいやな顔一つせず、走り回ってくれた。おかげで教室は、あつという間に石置場へと変わっていった。

「せんせい、こんなべちゃんこの石もあつたよ。」

と教室へ駆け込んで来た子。準備の段階から、子どもたちの学習は、すでに始まっていた。

そして、いよいよ当日。緊張している私の心とは裏腹に、子どもたちは、いつもと変わらない様子で、授業を迎えた。

「今日は、石をたくさん積んで、高い上地タワーを作ろう。」

石積みやり方を聞いた子どもたちは、「はじめー」の合図が待ちきれなかったかのように、すぐに石さがしに夢中になっていた。べちゃんこの石ばかり集めて積む子。大きな石を土台にして積んでいく子。崩れそうになる石を息をひそめる思いで見守る子。子どもたちの顔は、真剣そのものだ。

八ツ、九ツ、十と悪戦苦闘しながら、石を積み上げていく。よそ事をする子など一人もいない。子どもたちが積んだ石は、見る見る数を増していく。

「二十一こつんだよ。」
とどこからか声があがる。

子どもたちは、石積み遊びを通して、石積みに適した石の形や大きさ、積み方があることに、自然と気がついていったのである。

石ころの最後の授業「動物園や遊園地を作ろう」でも、子どもたちは、意欲的な姿を見せてくれた。

教室一面に敷いた青いビニールシートの上に、子どもたちの作った動物が形を表わしている。

「せんせい、ぞうができたよ。」

「これ、かめのおやこだよ。」

「となりの子とつなげて、めいろをつくってもいいかな。」

「わたしたちが、うえじどうぶつえんって石でかくわね。」

教室の中は、あつという間に上地ランドに早変わり。用意していた石が、見る見るうちに動物や乗り物に姿を変え、石置場のそこが見えてくるほどになってしまった。一人で取り組んでいた子がグループに、そして、最後にはクラス全体へとつながっていった。協力して学習する楽しさも勉強した。

子どもたちは、遊びが大好きだ。学習の中に遊びの要素が含まれると、どの子も夢中になってしまう。そして、目的を持った遊びは、学習そのものだ。遊びを基にして、「できた」「わかった」という満足感や成功感が感じられた石ころの学習は、子どもにとっても私にとっても有意義な学習であった。学校の行き帰りに見下ろす川原。石集めに何度か足を運んだその川原を見るたびに、楽しかった石ころの学習が思い出されるのである。



一年 都築 英明

八、紙袋で変身して「パーティをしよう」

二年担任 中嶋 ゆかり

「せんせい ねえ、ハロウィンのパーティしようよ。」

「やろう。やろう。ハロウィンのだから、変身してやろう。」

子どもたちの中からそんな声が出てきました。

「変身してパーティするなんておもしろそうだね。」

二年組みんなで、自分の好きなものに変身してパーティをすることになりました。

紙袋や毛糸、包装紙、折り紙、身近にある材料を使って作品作りをします。子どもたちは毎日少しずついろいろな材料を集めてきました。持ってきた紙袋を頭にかぶって歩き回っている子どもたちもいます。

そして、アイディアスケッチ。自分は何に変身しようか一生懸命考えています。

「ぼくは、忍者だよ。」

「わたしは、天使に変身するんだよ。」

そのほかに、「ゴジラ」「神様」「たこ」「かめ」「ベガサス」……いろいろなものが出てきました。つきは、形作りです。持ってきた紙袋の形を、ホチキスやはさみを使って変形させていきます。「はさみは、刃の奥の方できるんだよ。」はさみの使い方は練習してきたので、なんとかうまく使えます。ホチキスは子どもたちの力ではうまくはりがささらないところもありました。やっと、形ができあがり、さっそく身につけてみると、「ビリー」破れてしまう子も、何人かいました。せっかく

作ったものが破れてしまっても、子どもたちは、もくもくと直しています。

何度やってもうまく行かない子もいましたが、みんなあきらめず作り直していました。

一生懸命、形作りをした紙袋に飾りつけをします。机の上には、今まで集めておいた包装紙や、毛糸がいっぱいいます。

「……………」

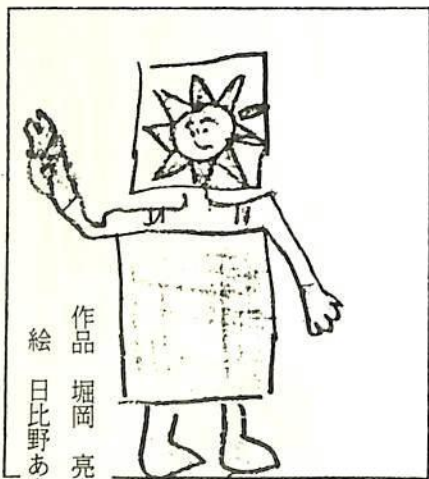
みんなもくもくと飾りつけをしています。毛糸は、のりではなかなかつきません。でも、一本いっぽん丁寧に貼りつけていきます。子どもたちの顔は真剣です。

まちに待った変身パーティの日。校長先生や教頭先生方にも招待状を送りご招待しました。変身して、歌を歌ったり、踊ったり。思うように体が動かず困っている子もいます。パーティの後の子ども達はどの子も満足顔でした。

この作品作りを通して、はさみの使い方やのりの使い方を学びました。ごみの処理もきちんとできます。それに何よりも、ものを作る楽しさを知ったのではないのでしょうか。ごみ箱に落ちていた色紙を拾ってきて、とても楽しそうにきれいなカードを作っている子どもを身ながら、私自身も、作ることの楽しさや、姿勢の大切さをあらためて感じました。



作品 森 真由美
絵 戸荻 史帆



作品 堀岡 亮太
絵 日比野あゆみ

九、学芸会の魅力ってすごい

三年担任 酒井 幾子

学芸会の台本を渡した。

「先生、このお話、知っているよ。」

「どの役をやるのかな。誰が、どれをやるか、いつ決めるの？」

「ぼく、王様がいいな。」

など、元気な声が教室中をとびかった。

三学期に入るやいなや始まった学芸会の練習。今年は例年に比べ、学芸会の日が早い。どのクラスも教室の中から大きな声が毎日聞こえてくる。練習期間が短いだけに熱がこもっているようだ。

役は、一人一役。学級オーディションが行なわれた。自分のやりたい役を練習してきて、みんなの前でせりふを言う。審査員はクラスの友だち。声の大きさ、感情をこめた言い方などで誰が一番上手に言えたか、その役にあっているかななどで決めてくれる。このやり方では好きな子とか仲良しの子を選んでしまうのではないかと心配したが、子供たちの見る目、聞く力は予想外に正確で、その子一人ひとりの性格にあった役を選んでいるのは大変びっくりした。一度で役の決まってしまう子。二回も三回も希望する役に落ち、何度も何度もいろいろな役に挑戦する子など様々である。しかし、最後には、どの子も自分の納得する役に決まっていたようだ。驚いたことには、学習中にはいつも蚊の鳴くような小さな声でしか話をしてくれなかった子でも、学芸会のせりふになると人が変わったように大きな声が出る。不思議なものだ。子供自身のやる気と、学芸会の魅力ってすごいなあ、と改めて思った。

この台本を選んだ時は、全員一人で一言ずつ話すため、声の小さい子、気の小さい子はせりふが言えるかな、と心配もあったが、どの子も一つの劇の中で一度は舞台の上で声を出してせりふを言わせたいという意図から、思い切って決めて良かったなあと思う。

毎日行なわれる学芸会の練習や準備。せりふや劇の流れの練習のほかに、小道具作りも進められている。

「王様の家来は、鉄砲を持ったり、やりたいものを持った方が格好いいじゃない。」

「金きんのテープを服につけたらいいじゃん。」

子供たちのかぶるお面も手作り。自分たちの手で紙を貼り、色を塗ったもの。同じ要領で作ったが、どのお面一つをとっても同じ表情のものではなく顔が違う。二十四匹のかえるが出るが、二十四通りの顔で、よく見ると、かぶる子供の顔に似ているのが不思議だ。舞台の後ろに貼る背画紙もB紙三十枚を貼りあわせてかいた。池の中の様子だが、子供たちが図書室で探した本などを見てかいたものだ。絵の具の筆を使い三十四人の力を合わせて作ったものだから、出来栄えはとにかく味のあるものである。

あと少しで学芸会。練習や準備も着々と進んでいる。今まで練習してきた成果をすべて出し、精一杯演技してほしいなあ、と思う。この学芸会を踏み台とし、子供一人一人がまた一段と成長してくれることを願っている。

ぼくは こうのとり

三年五組 宿谷 聡

先生から学芸会の台本をもらった。劇の題は『かえるの王様』だ。ぼくはなにをやるのかな、と思いながら台本を読んだ。その中で一番好きなこうのとりをやりたなあ、と思った。こうのとりは、ちょっといいわいんだけど、せりふが長くてもいいやすすいので、これに決めた。



家に帰って、何度も何度も、このとりの練習をした。おふろの時もねる前もした。五つせりふがあったが五つともすらすら言えるよう、がんばった。

次の日の朝も練習をした。学校へ出かける時、おかあさんが、

「今日、このとりになれるよう、がんばってきてね。」
と言ってくれた。

いよいよ学芸会の役を決める時がきた。このとりになりたいのは、けい君とぼく。二人だけだった。じゅん番にせりふを言った。けい君も大きな声で言っている。ぼくも負けずに大きな声を出してせりふを言った。

五つとも練習したようにすらすらと力いっぱい言えた。友達が、どちらがこのとりになれるかえらんでくれる。先生が、

「宿谷君の方がこのとりにいいと思う人？」

と聞いた。友だちの手がたくさん上がった。

(やったあ、ぼくがこのとりになれたんだ。)

一番やりたいのできる。うれしくてうれしくて思わずみんなにピースをしてしまった。家に帰ってすぐにおかあさんに知らせた。

「よかったね。一生けんめい練習したからなれたんだね。」

と、ほめてくれた。

あしたからの練習は、上手にこのとりがやれるようがんばりたいと思う。

十、やればできるぞ！642回

四年担任 竹平 真仁

「五百回跳べたら、一時間放課をあげてもいいな。」

ちよつと無理があるかな・・・そう思いながら言った一言でした。

二月十二日から始まった運動委員会主催の「なわとび週間」。今週は三・四年生が長なわに挑戦する番です。四年四組でも何回跳べるか記録を作ろうとがんばりました。

ところが最初はなかなかうまくいきません。男の子たちは、

「長なわなんかより、ドッジボールのほうがいいよ。」

と、あまり乗り気ではありません。女子だけで跳んでいても、二十回ぐらいがやっと。せっかくの「なわとび週間」なのに、このままでは寂し過ぎます。

とりあえず、やる気のある女子の練習につきあうことにしました。さすがに女子は慣れていて、なわの回し方もうまいものです。タイミングの合わない子には、みんなが声でなわに入るきっかけを作っています。

「来るよ。来るよ。はい。そうれー」

「あくあ。ひっかかっちゃった。」

子供達の元気なかけ声と、溜め息が繰り返し聞かれます。しかし練習の成果があったようで、なんとか百回を越せるようになってきました。

そうこうするうちに、遠巻きに見ていた男子も二人、三人と列に加わるようになりました。初めは照れ臭そうに飛んでいた男子たちですが、跳んでみるとその上手なことには驚きました。男子の数が増えていきます。どうやらみんなやる気になったようです。

体育の授業に長なわを取り入れた時のことです。クラスを半分に分けて競争したところ、一方のグループでは二百四十回ほどいきました。そこで私自身もできればいいなという思いで「五百回跳べたら……」の発言となったわけです。

さあ、こうなるのもう大変です。朝放課。二十分放課。昼放課と男子が真っ先に練習を始めるようになったのです。ものすごいやる気で跳んでいることが伝わってきます。私もなわを回しながら応援します。

「おそーい。もっと速く入るんだ。……そう。今の飛び方うまいぞ。」
子供達は目を見張るような勢いで上達していきます。

「先生、五百回できたら本当に一時間放課だよ。」
そう言って放課になると運動場へ飛び出していく子供達。さらに副担の長坂先生が強い味方になってくれました。私が出張の時など、いつも子供達と一緒に練習して下さったようです。ある日、私が出張から帰ると『先生、今日長なわをやったら三百四十九回できた』という置き手紙がありました。

そして長なわに挑戦する最後の土曜日がやって来ました。

「さあ、みんなで記録を作ろう！」

と、元氣よく始まりましたが、なかなか調子が出てきません。二十回、三十回でひっかかってしまいました。

「気をつけて！もっと声を出してよ！」

女子の必死な声が飛びます。ようやくリズムに乗り出してきたのか、百回、二百回と続くようになりました。しかし目標の五

百回には遠く及びません。気持ちを入れ替えようと、全員を集めて作戦会議です。

「五百回と言ったって、三十八人で跳んでるんだから一人十四回ぐらいしかないんだよ。自分が跳ぶ一回一回を大切にすれば出来るはずだ。がんばろう。」

再び挑戦です。百回、二百回……今度はひっかかりません。三百回を

越すと、誰もがいけそうだと思います。

「あー！危ない。もっと真ん中で跳べ。」

男子も声を飛ばします。ついに四百回を越しました。その瞬間を待つように、かけ声が一段と大きくなります。そしてついに、

「四百八十……四百九十……四百九十八、四百九十九、五百、
ヤッター……」

みんな跳び上がって喜んでいますが、まだまだ続きます。

結局六百四十三回目にひっかかり、みんなはその場にへたり込んでしまいました。しかし次の瞬間には、

「やったぞー！六百四十二回だー！」

という子供達の歓喜の音が、天にも届きそうな勢いで運動場中に響き渡りました。



・・・六百四十二回で止まってしまったら、みんなはがっかりした表情で

「ああ。」

と言いました。でも、またみんなでわいわい言いながら、抱き合っていました。上坂さんはうれし泣きをしていました。ほくもとてもうれしかったです。伊与田君は

「六百四十二回。六百四十二回。」

と言いついていました。由香里さんは、

「手が痛い。」

と言いついていました。教室に入っても三石君が、

「四年四組の教室はうれしきで一杯です。」

と言いついていました。・・・

四年 尾上 浩一

「先生、今度は千回跳びたい。」

そんな声も聞かれます。まったく子供達の集中力・やる気には驚かされます。次の目標は何にしようかと、うれしい悩みです。放課目当てで始まったことであっても、子供達にとっては素晴らしい経験だったことでしょう。

早いうちに子供達との約束を守らなければならないようです。

十一、四十五才からの出発

五年担任 金子 喜子

丸井銑三氏が描かれた「コロッセイム西の工場」の絵画は、上地小学校の玄関で子供たちや来客をいつも見守っている。春はまだ浅いが心なしか暖かさを感じた二月八日、五年生は「丸井先生にお話を聞く会」を持つことができた。

若松在住の先生は、十二点の絵画と画材等を携えて「私の健康法」と称する自転車で、この日もお見えになられた。常に笑顔で気さくに話される先生に、子供たちの緊張も解け、うなずきや元気な返事も出始めた。

しかし、必要以上の身動きもせず子供たちの耳を集めた話。それは、先生が画家とされた動機とそれからの行き方についてである。

裁判所へ入られた先生は、組合の執行委員長も務められたが、ある時、思うことがあって転職を考える。

小説家か画家か迷った末、後者を選ぶ。この時、四十五才。

就学時における図画の成績は「乙」。二中時代、油絵を二枚描いただけのことだ。

子供たちにとり、これは七十五才という年令を聞いた時以上に、意外なことであった。

お会いするまでは、校長室や玄関に飾られている大きなすごい絵を描く人であり、話の中では、六年の時、十数枚絵を描いた。見た人から「将来絵描きになるね、と言われた。」と聞き、若い頃から画家であったと思っていたからである。

驚きの声は続く。四十五才で描き始めたその年に、入選の賞に輝いたのだ。

「先生は絵が大好きだったから命をかけていた。夢中になって描いたのでころろがこもったものが描けたのだ。何事も成功させるには、その事に集中することだ、と思った。(五年 星野 静子)

真剣に取り組む姿を感じたのは、彼女だけではない。
「雪が降っていると絵は描けないから、その風景を数時間見ている、帰ってから描く。」

「山下清さんのはり絵にあこがれた。山下さんは色紙。ぼくは布でやってみた。」
何の苦勞もなかったかのように、むしろ楽しそうに話されるが、独学で今日の名譽を築かれた努力は、大変なものであったにちがいない。それを子供たちは感じ取っている。

一年で入選という楽しい事はばかりではなく、苦勞を乗り越えたから、すばらしい絵描きさんになったのだ。僕も見習って、負けそうになった時、がんばろう。
(五年 松永 達也)

先生は努力を人一倍していらっしゃる。布ではり絵を工夫しただろう。僕はすぐめんどくさくなつてやめてしまう。最後までやりとげる事を学んだ。
(五年 花田 康仁)

悲しくて思い出すのもいやな事があつたと思うのに、私たちに生き方のすばらしさを教えてくださった。つらさを乗り越え努力する事を見習っていきたい。
(五年 横山 知美)

スポンジが水を吸うように、子供たちは先生の人生観の中からたくさんものを学んでいたが、私は単純に、会の後、雑談した内容の方が子供たちは関心があつたのではないかと、思っていたのである。

翌日、子供たちの声を前にし、視野の狭い自分を恥じずにはいられなかった。

絵の描き方や見方は他の人にもできる。四十五才から画家としての歩み方は、先生でなければ語れないのである。聞かせてもらえないのである。

「私の考え方は、健康な身体と真剣さだ。」

先生のお話は、今現在も、いつかの時も力強い支えとなるであろう。

—— お話を聞いて心の持ち方や努力について学ぶことができた。今日、学校を休まなくて本当によかった。
(五年 寺田 恵子)

そのとおりである。

丸井先生からも、子供からも学ぶことの多い一時であつた。

十二、クラスの思い出ベストテン！

六年担任 名倉 嘉章

卒業期を迎え、小学校生活の思い出話に花が咲く、六年生の教室。子どもたちの会話の中に、割り込んでみます。

「そういえば四月に、『六年二組をどんなクラスにしたい？』って聞いたとき、『男女の仲が学校中で一番良く、いい思い出をいっぱい作るクラス。』って言ったよね。目標は、達成できそう？」

子どもたちが、一人一人の思いを口にしながら始めます。一人一人のクラスに対する思い出を、『クラスの思い出ベストテン！』という形にまとめてみました。

クラスの思い出ベストテン！

第一位 『ねるとん紅鯨 男女の仲』

—— 六年生になってすぐ友達が出来た。ねるとんを始めてから、男女の仲がすごくいい。男女仲良くがバッチリ！誘いあえるクラスになったね。
(宮本 知宏)

『友達』

六の二の男女の仲の良さが、学校中に自慢できた。初めてやったときは、心がドキドキだった。
(吉田 悦子)

第二位 『新聞に載った 映画作り』

仲間作りが早い！
—— 文化祭でやった映画のコーナーが、新聞に載つたので最高でした。文化祭までして撮影して、大成功。本当に良かった！
(本間香奈子)

きちんと計画を立てて、六年生として恥ずかしいことができた。文化祭でのクラスの踊りも、バッチリだったね。
(杉田ひとみ)

第三位 『夏休みのミニ 運動会』

—— 最初は宿泊を予定していたんだけど・・・でも、学校に集まってゲームをしたり、昼食の調理をやったり、楽しい一日だった。
(渡部 亮介)

(西尾 和子)
(大滝 貴司)

- 第四位 『先生の誕生日』 — 先生にないしょで、みんなで支度した。カセットのプレゼント。クラッカーを鳴らしてハッピー！！
先生が教室に入ったとき、学級のかけ声や学級歌で教室がいっぱい。
マラソン大会3位以外、みんなドベ！V3を達成してしまった。
ノーコメント・・・。
球技大会の後、先生が笑ってごまかそうと言った。ドベをとって笑って、万歳をしてしまった。
(成瀬 里香)
- 第五位 『ドベV3達成』 — マラソン大会3位以外、みんなドベ！V3を達成してしまった。
ノーコメント・・・。
球技大会の後、先生が笑ってごまかそうと言った。ドベをとって笑って、万歳をしてしまった。
(成瀬 里香)
- 第六位 『クラスマス パーティー』 — 食事中の芸、おもしろかったなあ。
あのときは・・・食べ切れないほどの食事を作って給食が・・・。
ケーキを作ったり、調理実習とは違う楽しさがあった。
(柴田 学)
- 第七位 『フェスティバル！』 — やりたいことを本気でやるクラスだった。
ミュージックフェスティバルなど、先生が時間を取ってくれた！
イントロクイズ、先生の特別参加などとても楽しかった。
(白銀 恭子)
- 第八位 『激論！学級会』 — 学級歌を決めるとき、泣きながらも自分たちでがんばって、決めた。
いっぱい学級会をやった。みんなに誕生日祝ってもらった。
話がそれることもあったけれど、楽しかったなあ。
(水田 貴裕)
- 第九位 『学級通信 トライ！』 — 毎日出て、びっくりした。けっこう楽しみにしている。
『トライ！』をやっていて、みんなの心が一つになってきたと感じた。
日記を時々忘れることがあったが、前より出したかなあ。
(阿部 竜久)
- 第十位 『調理・会食』 — いもパーティー。やっぱり自分たちで作ったいも料理はうまい！
一年二組の子と、なかなか楽しいことだった。
一年生登場。楽しかった会食。
(堅本 康浩)
- (黒柳みずき)
(中野 篤憲)
(矢田しほり)
(成瀬 郷子)
(細井三由紀)
(田中 順一)
(山田 景子)
(中根 瑠美)
(浅井真智子)

どうやら、『学校中で一番男女の仲が良く、いい思い出をいっぱい作るクラス』という点では、自分達なりに満足のいく一年間であったようです。クラスの行事に限っても、この表に書き切れないくらい思い出が出てきました。運動会や学芸会を初め各種の学校行事、さらに、苦く苦しい思い出も加えると、その数は膨大なものになることでしょう。

卒業の日を間近に控え、少しセンチメンタルな気分になっている子どもたちを見て、新しい舞台で、さらに素晴らしい思い出作りをして欲しいと願わずにはいられません。彼らと同じ時間を共有できたことを感謝しつつ・・・。

四、学校ニュース

卒業生からの贈り物

一、リングトンネルが完成

去る十九日、運動場の北側に「リングトンネル」という遊具が設置されました。この遊具は、この三月に巣立った第六回卒業生から記念品として学校へ贈られたものです。直径約一メートルの鉄製リングを並べてトンネルにしたもので、その長さは五メートルほどになります。立派なプレゼントです。しっかり遊びます。

学級担任から、トンネルの上を渡り歩かないという、一つだけの注意を受けた後、いよいよ二十二日から自由に遊んでも良いことになりました。

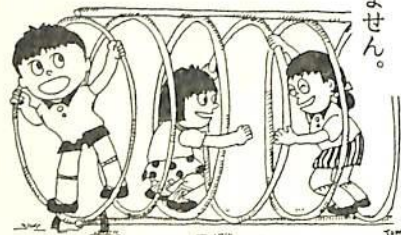
一時間目の放課はたった十分間です。チャイムが鳴り終わるとともに走ってきたのは、二年一組と五組の男子五人でした。トンネルの中央を陣取って『学校中で一番』の優越感に浸っていました。腕組みをして動こうとしません。少し遅れて、一年生や三年生がどっと押し掛けてきました。十五人くらい入るといったばいになりました。遅れてきた子には順番が来そうにありません。あきらめて帰っていきました。

「こんなに混んだら、遊べないよ。」

とは言っても、辺りは落ち着いてきました。リングの間隔二十センチを擦り抜ける子、両手、両足を使ってぶら下がる子、いろいろな遊び方があるものです。

ここでチャイム。残念。放課は終わり。初めからいた五人のチビッコも教室へ走って行き、運動場はまた静かになりました。

(大井 記)



河合友子

二、こんにちは うお光さん

一年生がお店やさんの見学

五月の中旬、二年生が魚屋さんの学習をするため、うお光食品店さんにおじゃましました。

「私、お母さんとよく来るお店なんだ。」

なんて言いながらも、いつもと勝手がちがい、ちょっと緊張した顔つきで、店の中をうかがっていました。

店の中へずつと歩いていくと、ケースの中ではアジ、サバ、ボラなどが氷の上に並べられていました。

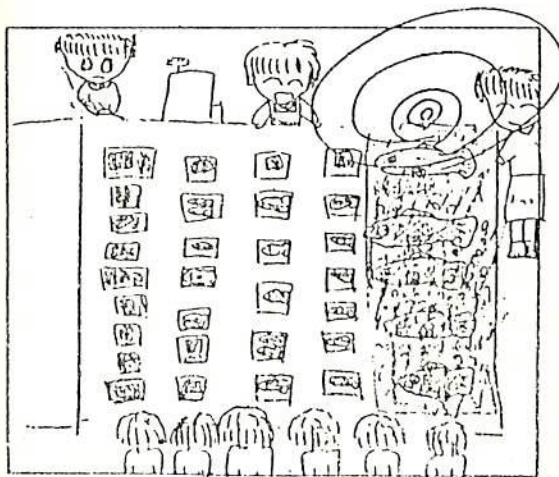
「あっ、エビだ。」「ちがうよ、これはシャコ。」

つい、魚の種類に目がいつてしまっています。そつと手を出そうとする子もいました。そこで、先生の一言、

「魚の名前はもういいの。おじさんの様子はどうか。よく見てごらん。」

さすが、核心をぐつととらえて、子供の目を働く人に向けさせる。

この時期、二年生以外にも、ドミ、上地農園、加藤牧場、オカリョウさんなどのお店や、区画整理組合、上地配水場、消防団施設、こどもの家、公園などの施設の見学にも行きました。いろいろお世話になっています。 (長坂 記)



2年 こんどうちえ

三、「生き生き学習」をテーマに実践報告会

—八百人を越える参観者迎えて開催—

初代野田守司登校長は「生氣あふれる学校づくり」を提唱され、児童・職員・学区一体となって実践を進めてこられました。その成果の一端は昭和六十一年、道徳教育の研究として発表させていただきました。

このたび、この研究の成果を踏まえ、さらに発展させることを願って、「学級づくりを基盤とした学習指導—生き生きと学習に取り組む児童の育成」をテーマにささやかな実践を報告させていただきました。

(実践報告要項—嶋田稔校長はじめのことはより—)

「二」「体がムズムズする」「緊張してるよ」と子どもたち

六月十三日(火)晴

前々日まで三日間も降り続いていた雨もすっかり上がり、朝から初夏の太陽がそそぐ好天に恵まれて迎えた実践報告会の朝です。

心なしか、やや上気した子どもたちがサンクガーデンに姿を現わし始めました。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

いつもの元気な声が響き合い、上地小学校開校以来二度目の研究発表会の当日がやってきました。早速、子どもたちの胸のうちを聞いてみました。

「うん、なんだか、体がムズムズしてる。きんちょうしてるのかな。」

と、二年生の西川さんがきれいな瞳を輝かせて言いました。

「何？ぼくは何ともない。いつもの通り。」

と、さすがに六年生の男の子たち。

にこやかな朝の会話が学校木「けやきの木」の下で繰り広げられています。

「二」 「私たちも生生き生きさとお手伝いを」とお母さん

この日の午前十時三十分、PTA役員・委員さんたち七十八名が実践報告会成功を目指してお手伝いに集まりました。成瀬副会長さんのてきぱきとした司会で打合わせ会が始まりました。

「子どもたちは必ず立派にやってくれます。職員も計画や準備などきちんと終わり、もう八パーセントは成功したようなものです。あとは、お母さんたちのお力です。」

体育館で校長先生が歯切れのよい挨拶に立ちました。

「そうよ、私たち子どもたちに負けられません。」

「生き生きと、にこやかに参観の先生たちをお迎えしなければ。」

国道二四八号線で学校案内板を持って立つ、交通安全腕章を腕に駐車場案内に走る、テント内で来賓や一般会員の受付、受付から会場への案内を受け持つ、体育館や保健室での来賓接待などそれぞれの役割りについて、細かな確認がされていきま

した。

十一時三十分には、昼食を済ませたお母さんたちが、いよいよ行動を開始しました。清掃に取りかかった子どもたちとこり笑顔の挨拶を交わしているお母さんもいます。

「三」 「さあ、がんばってきます」と先生たち

「わあ、すごい、次々車が入って、もうあんなにいっぱい！」

午後一時。放課が終わって子どもたちが教室に急ぎます。

職員室の窓から運動場を眺めた先生たちが驚きの声を上げました。

公開授業の定刻前に、もう三分の二は車でうまっています。体育倉庫の北側には、我が子の授業を一目見ようとかけつけたお母さんたちのオートバイや自転車がいっぱいと並んでいます。

「さあ、がんばってくださいよう。」

「子どもたちも勢いよくやってくれるといいけど。」

授業開始の一時二十分が近づくと、職員室から先生たちが口々に話しながら教室に向かって出かけて行きました。



完成なった「にこにこ橋」でも授業

〔四〕 「これは素晴らしい、本当に生き生きしています」

「教頭先生、三百部用意していた袋入りの実践報告要項がなくなってしまいました。どうしましょう。」
テントで受付をしていた加藤事務主査さんが、飛んで来ました。

「そうか、予想以上だね。申込みは三百人を少し切っていたので、三百人分で間に合うと思っていたけど。それじゃあ、職員のを差上げて下さい。」

こんな会話で大盛況の公開授業が、市民ホームや子どもの家を含めた二十六教室で開始されました。

伊豫田教育長さん、糟谷教育委員長さん、鈴村元教育長さん、近藤西三河教育事務所次長さん、太田岡崎市長会長さんを初め各教育委員会関係の指導的な立場の先生方が、嶋田校長や大井教務主任の案内で授業の参観に出発されました。柴田社会教育委員長さんや房宗前医療事務所長さん、畔柳区画整理理事長さん、佐野市民ホーム運営委員長さんら学区の団体長さんも次々と教室を訪問されています。

「これは、素晴らしい。本物です。子どもたちが伸び伸びやっています。」

廊下で出会った大門小学校の柴田校務主任先生が、笑顔で語って下さいました。

「そうですか、それはうれしいお言葉です。本当にしてもいいですか。」

「授業前に廊下でいきあった子どもたちも、今、教室で活躍している子どもたちも、みな、生き生きしています。」

眼鏡の奥の瞳は真実の声と見えました。

「子どももいい、お母さんたちの対応もいい、先生の顔付きもいい。みんな、そう言っておる。」

一昨夜、野犬に襲われてみじめな最期を遂げたチャボたちの牧場前で、鈴村正弘先生が話しかけて下さいました。四階から子どもたちの元気な歌声が聞こえてきました。新任の富田先生が第一音楽室で奮戦中の授業、「ミニコンサートを開こう」か

らの歌声でした。

「地域の方たちも直接授業に参加しておられますね。新興の学校で大変でしょう。」

六年四組の高橋由美子先生が取り組んでいる授業、「土地焼きに挑戦しよう」の取材に来校していた毎日新聞社の記者がペンを走らせながら語ります。

四十五分間にわたり熱気にあふれて展開された「生き生き学習」を目指す授業が、数々のドラマを残して終わりました。

〔五〕 「教師白らが子どもたちの輪に入り……」

——大井教務主任ら四名の報告口は共感の拍手——

公開授業が終わると、三百五十席用意した体育館の報告会場はほぼ満席となり、いよいよ実践報告が始まりました。

「本学区は、これから発展する上地、若さあふれる上地と申しても過言ではないものと思います。」

大井教務主任が、スクリーンに映し出されたOHPやスライドの画面に目をやりながら基本報告に入りました。暗幕が閉められ館内の参会者たちがステージに集中しています。一人十五分以内という限られた時間の中で約一時間の実践報告が行なわれました。

「学級づくりを基盤とした学習指導」

教務主任 大井 正之

「一人ひとりを認め合う自由で生き生きとした学級づくり」

学級経営部長 渡辺 修

「一人ひとりへの理解を深め、生き生きと活動する児童の育成」

児童理解部長 金子 喜子

「地域にも目を向け、教師の創意工夫による生き生きとした学習の展開」学習指導部長

守山 妙子

―活発な質疑を展開した協議会―

四人の先生たちの報告が終わり、蒸し暑かった館内に、暗幕が開けられた窓から涼しい風が吹き込んできました。

二十分間の予定で組まれた全体協議会が始まりました。

「ご参会の皆様から質疑やご指導をお願いします」

司会者の挨拶が終わると、すかさず、三人の先生方が中嶋先生が届けたワイワレスマイクを握って立たれました。

「学級会の司会がとてうまくできていました。しかも、輪番制のようですが、その指導のポイントを聞かせて下さい。」

「先生の創意工夫でとても楽しい授業の雰囲気を感じられました。その上、確かな力もつけていくと要項にあります、その指導の具体例を聞かせて下さい。」

学級づくり報告会

郷土愛、仲間意識育て
焼き物づくりなど取り入れる

1989年(平成元年)6月14日(水曜日) 西三河 16

岡崎市立上地小(出典校長 長 坂重九郎二十六)で十三日、昨年から研究活動続けてきた「学級づくりを推進した学級指導」の実践報告会が行われた。

この報告会には、市内各小から分属独立し、岡市西部の土地区画整理区域に転居した新設校、全用室の約四割が完成したばかりで、生徒同士の仲間意識がたかまわがため、児童に仲間意識を育て、郷土への愛着を深める教育に力を入れている。昨年度のテーマを振り返り、学習指導要領、児童理解、学級指導の三部を設け、「地域に目を向けた学級」「二人ひとりの児童への理解を促す指導」「自由で生き生きとした学習環境づくり」の三主題を決めた。

毎日新聞の報道

「地域に教材を求めて授業をされ、子どもたちのやる気が高まっていったようですが、個々の子どもたちの変化などについて実践例をもとに聞かせて下さい。」

本校の実践を高く評価されながらも、核心をつく質疑が続きました。名倉・川尻・太田・高橋の各先生が自身の学級での実践に基づいて歯切れよく答弁に立ちます。

「よく分かりました。ありがとうございます。」

質問された先生方の了解を得たころ、もう残された時間は数分しかありません。次の方の手が上がりました。

「個々の子どもたちへの指導を進めておられますが、授業の中で特に留意して観察指導する子どもの選び方などについての成果と合わせて聞かせて下さい。」

「二年生のザリガニの観察を中心とした授業を見て、子どもたちの観察力や息の長い表現力、それから、喜々とした表情に驚き感激しました。上地の先生たちの指導の構えについて聞かせて下さい。」

青木・鈴木両先生がメモを片手に個人観察記録に記された子どもたちの成長を語って答えます。

「本日の上地空襲の表現運動で、抽出児童は一層生き生きと学習に取り組みました。」

答弁に立った鈴木先生の表情には、子どもたちと一体になって授業を創り出してきた苦勞と喜びが感じられました。小豆坂小学校の松井教務主任先生から、名指して答弁を請われた岡本先生。

「突然のご指名でびっくりしていますが……」

と、前置きしながらも、ザリガニの模型や教室に作ったビニール敷きの大型観察池の活用に至った実践の経過を力強く語り

ました。

「七」 「学校・PTA・地域一体の努力が実る」

—鈴木依治常任講師と伊豫田教育長からも評価—

協議会が終わると、本校常任講師として研究実践のご指導を頂いて

きた元竜美丘小学校長の鈴木依治先生が登壇されました。演題は、

「生き生きとした学習の基本となるもの」です。

愛知教育サービスセンターでの「心の電話」による人生相談の体験をふりかえりながら、一人ひとりの人間の貴さを語り続けていかれます。

「心の電話を求めてくる人たちは、どうしても生き生きと生きていない方で、いわば、暗い面の相談ばかりです。いろいろな背景はありますが、この人たちへの個々の状況にあった社会の暖かな対応があれば、必ず社会復帰していけるものと残念でなりませんでした。」
「自分を取り巻く回りの者に対して、ものが自由に言えない人生なんて考えただけでも辛くなります。」

「上地小学校の子どもや先生を見ていて、一人ひとりがこれは自分の学校だという誇りをもっています。この心情が大きな基礎になって、生き生きとした学習や活動を開花させてきたのではないのでしょうか。もって生まれた個性を大事に育て上げていく学校づくりが、今、求め



鈴木依治常任講師のご講演

られているのではないのでしょうか。未成熟な子どもたちを適度に律しながら、励まし、やる気を起こさせていく上地小学校の行き方こそ、本物です。」

静かにベンを走らせて聞き入る若い先生やお母さんたちの姿が目立ちます。わずか四十分間でしたが、深い人間教育の理論と実践に裏付けられた記念講演が大きな拍手で終わりました。

続いて、演壇に立たれた伊豫田教育長先生から、実践報告会を締めくくのご講評を頂きました。

(松原 記)

伊豫田教育長先生先生のご挨拶

何よりも第一の上地小学校の印象は、学区とPTAが一体となった強力な支えがあるなということです。授業を見て思うことは、先生方が子どもの発言や考えをとんでも大事にしているということ、子どもたちの発言の息が長いということです。これは、子どもたちが安心して発言できるという学級ができていないからではないのでしょうか。先生も学級の友だちもちゃんと自分を受け止めてくれるという暖かさがあるからだと思います。

では、こうした基はなにかというと、それは、きっと、嶋田校長先生を中心として上地小学校の先生方が子どもをどう育てていくかということと一致しているからです。また、そうした、先生たちの姿勢が学区の方たちの信頼を集めることになるのでしょう。

今日の実践報告会を出発点として、反省を加えつつ、もう一歩進んだ高い峰を目指して進んでいかれることを希望して挨拶を終わります。大変素晴らしい発表に感激しながら、御礼を申し上げる次第です。

四、上地っ子の願いを込めて七夕集会

（体育館に全校が集う）

ささのはささの

のきばにゆれる

おほしさまきらきら

きんぎんすなご

七月八日（土）の第一時、体育館から子どもたちの歌声が聞こえてきます。早速、館内に入ってみました。

ミスターひこぼし、ミスおりひめも決まる

「今から上地小学校の先生の中から選んだひこぼしとおひめを発表します。」

ステージに立った集会委員の子どもたちがマイクを握ります。

「ミスターひこぼしは校長先生。ミスおりひめは河合友子先生です。」

その瞬間、一斉に拍手が起こり、にこにこ顔の二人の先生が挨拶に立ちました。

「とってもうれしいです。ありがとうございます。」突然のことでびっくりしています。選んでくれてありがとうございます。

係の子どもたちによって作られた色紙のレイを首にかけて校長先生と河合先生が手を振って応えました。

ささアメも作って大喜び

「ぼくたちが先生たちから聞いてきたささの葉を使った遊びを紹介します。」

マジックで書いた図をOHPで写しながら、ささの葉遊びの実技指導が始まりました。一枚ずつ配られたささの葉を手にした上地っ子が、スクリーンの図をたよりに作っています。

「青木先生が教えてくれたささアメができた。」「ぼくは大井先生のささ船にしよう。」

可愛い一年生の手も、ささの葉工作に挑戦しています。

さすがに六年生の手さばきはうまいもの。さっさと、船ができました。

「わあ、すごい。うまいなあ。このささぶね、なかよし池に浮かべてもいい？」

「はい、いいです。浮かぶかな。」「早速、帰りに浮かべてみようね。」

七夕集会の夢が広がっていきました。

小林さん、浅野さん、小田さん、森さんたちがお互いの作品を見せ合いながら、話題もはずんでいます。

「子どもたちに紹介するんだったら、もっと分かり易く作り方を教えておけばよかった……。」

「ささアメって、よく作ったんですよ、私の子どもの頃は……松原先生はどうでした？」

ささ工作の主人公にされた大井、青木両先生が少年時代を懐かしんでいます。

「私はささの葉の短冊に丈夫な赤ちゃんが生まれて下さって書いたよ。八月一日に生まれる予定だもん。」
弟の誕生を心待ちにしている四年生の塚本さんがっこり笑いました。

（松原記）

五、統計グラフコンクールで市長賞・部会賞

第十四回統計グラフ優秀作品展は、去る八月、岡崎市役所玄関ロビーで開かれました。市内各小中学校から全部で三七三点もの応募がありました。審査の結果、本校から応募した高学年の作品はほとんど入選しました。中でも、五年生の鈴木真一君、三浦武君の作品『楽しいよ 子どもの家』が市長賞に、また、同じ五年生の井口博君、花田康仁君、金森有紀さん、横山知美さんの共同作品『歴史上の人物五人 知名度調査』が、岡崎市算数数学部会長賞に選ばれました。なお、市へ応募した高学年作品に低学年作品を加えて県のコンクールへ参加しますので、その成績が期待されます。

県のコンクールへ参加作品

二年 「ぼくたちの宝もの」	小幡 朋史	三年 「楽しい楽しくない お父さんの食事」	大島加菜子
「みがいているよ」	藤田 夕器	「お父さん 遊ぼうよ」	別所 理子
「どんな本が好き？」	竹林美沙子	「メインストリートはどっち」	高妻 篤史
「三時のおやつ」	政木まゆみ	「どのじゅく行くの？」	加藤 貴俊
「先生 あそぼー」	市川 瑛己	「まんが大好き」	安田 晃

市・県の両コンクールへ参加作品

五年 「楽しいよ 子供の家」鈴木 真一	三浦 武	六年 「学級通信はやっぱり手書き」	落合 直子
「気をつけて あなたのとなり交通事故が」	大林亜紀子 鈴木沙耶花	「自分でできますか 自分のこと」	横井英里子
「気をつけよう 変なおじさん」	小森八千恵 大島 直子	「現代っ子の三大マナー」	政木みゆき
「おこづかいもへるかな？ 消費税」	中垣 綾 中村梨江子	「夜ふかしはやめよう」	藤原 真弓
「歴史上の人物五人 知名度調査」	井口 博 花田 康仁	「私たちは感動した 一杯のかけそば」	前山 麻美
	金森 有紀 横山 知美		浅野 志織
			近藤 千晶
			山本 樹里
			篠田 玲

ここで、市長賞に輝いた鈴木君、三浦君の二人がどのように作品を完成させていったのか、概略を紹介しましょう。

一、動機 日曜日になると、学校の隣にある『上地学区子どもの家』に遊びに行きます。また、夏休み中はいつでも開放してくれるので楽しみにしています。もっともっと大勢行けばいろいろな遊びができます。そして、利用している人がどんな気持ちでいるのか知りたくなりました。

一、調 査 目 下 の 欄 の よ う な 調 査 項 目 (アンケート) を 決 め て、三 年 男、女 五 年 男、女 各 五 十 人 の 計 二 百 人 に 協 力 し て も ら い ま し た。五 十 人 に 決 め た の は 計 算 を 簡 単 に す る た め で す。朝 の 会 や 帰 り の 会 な ど で 答 え て も ら い ま し た。項 目 を 決 め る 時 に は、分 かり や す く 簡 単 な 表 現 に す る よ う に、先 生 か ら も 教 え て も ら い ま し た。

二、集 計 アンケート集計用紙に学年別、男女別に人数を書き込んでいきました。全体の中の割合を知るために、人数を全体の数で割ってパーセントを出しました。同じ調査用紙を二回数えたり抜かしてしまわないように、済んだ用紙には印をつけるようにして注意深く集計しました。

三、グラフ化 七つのアンケート項目を学年別、男女別にどのようなグラフに表わすか考えましたが、並べたり、向かい合わせたりして比べやすくしました。グラフには、円、棒、折れ線、帯、柱状などいろいろなグラフがありますが、同じような表現にならないように変化をつけました。また、同じ棒グラフでも、角柱を斜めから見たように書くと立体的になります。五回も書き変えました。

四、レイアウト 一枚の紙面の上にグラフを並べました。そして、みんなが目にとめてくれるように、子供が遊んでいる絵もかき込みました。題は『楽しいよ 子供の家』として、バレーボールのネットを背景に明朝体で大きく書きました。アンケートの項目の一は「子供の家へは」、二は「よく使うのは」、五は「行く理由」のように短い言葉で表わし、少し大きめの文字で書きました。一枚の紙面にグラフ、見出し、挿し絵などバランスが取れたら色鉛筆で色を塗ってみました。

色の組み合わせを考えていたら、四枚になりました。グラフの配置の用紙も入れると七枚になります。その中で一番気に入った作品を特にきれいに書いてから、コピーにかけて拡大しました。

五、清書 規定の大きさのパネルにB紙を水貼りして、乾くのを待ちました。コピーして拡大したグラフや文字や絵などをB紙に写し取りました。次にネオカラーで色塗をします。色を混ぜると汚くなるので、平筆、細筆を使ってはみ出ないように注意して塗りました。文字に色をつけるときが一番気を使いました。まっすぐな線と同じ太さに書くときは竹の物差の溝の部分を利用して上下左右の端を切り取って完成しました。

アンケート調査したのは夏休み前でしたが、完成したのは八月三日でした。十日くらい学校へ出て書きました。二人の意見が違ふこともありましたが、出来上がったときはとてもうれしかったです。

★一言感想★ (鈴木君) 色を塗るとき、細かいのでほかのところまでよごれるので困りました。

(三浦君)

細かいところをはみ出したり、ぼたぼたと色が落ちてよごれて困りました。

(大井 記)



- 一 子どもの家に行ったことはありますか
(ほとんど毎日 時々 一回だけ なし)
- 二 何をして遊んでいますか
(すもう バスケ サッカー バトミントン)
- 三 四 六 (略)
- 五 なぜ子どもの家へ行きますか
(おもしろいから 遊ぶ場所がないから 他)
- 七 夏休みに行きたいですか
(はい いいえ) はいの人は遊びの名前も

六、女子バレー部公式戦最後を優勝で飾る

（第十回愛知県県小学生九人制バレーボール大会）

十月八日（日）名古屋市稲永スポーツセンター体育館で、平成元年度第十回愛知県小学生九人制バレーボール大会が行なわれました。愛知県下から、それぞれのブロック大会を勝ち抜いた十チームが参加しトーナメントで覇を競いました。本校の女子バレーチームは、西三河地区大会で同じ岡崎市内の本宿小に惜敗しましたが、二位に入賞し県大会への出場権を獲得していました。

「今年度公式戦最後の愛知県大会では絶対に雪辱を果たしたい。」

「必ず優勝してきます。」

大会に臨む選手たちの雪辱を期す気迫の声でした。以下、大会の様態を記してみました。

午前八時五十分、上地自動車学校のご好意で配車された二十九人乗りのスクールバスで稲永スポーツセンターに到着しました。体育館に一步足を踏み入れると、すでに、県下から集まった男女十五チームの子供たちが試合開始前の練習に入っていました。地区大会で本校を降した本宿小学校も、すでに準備万端、全開の体制で汗を流しています。

「や、や、これはすごい。遅かったみたいですね。」

「負けてはおれない、早速横断幕を張りましょう。」

少年団の夏目さんと後藤さんが、二階観覧席から「がんばれ、力いっぱい、上地っ子」と大書した応援幕を降ろします。

一、一戦とも大差で勝ち進む

第一戦は、名古屋市中川区の正色小学校との対戦でした。昨年度優勝校の上地に体当たりの戦いを挑んできます。第一セットでは十二点を許しましたが、ついにそれまで。第二セットも六点に押え、ストレート勝ち。

「これは、優勝戦は岡崎同士の気配が濃くなったね。」

応援に駆け付けた嶋田校長の言葉が耳に残りました。

続いて第二戦は、同じく名古屋千種区の田代小学校です。このチームを破れば、優勝戦に進出することになります。正色戦で波に乗ったのか、これまた、一方的な試合展開となり、二十一対三、二十一対三と連取し、全く寄せつけずストレート勝を収めました。

ストレートで本宿小を破り優勝

「とにかく、西三河地区大会では上地が負けたのだから、よほどがんばらないといかん。」

つめかけた本校応援団の中で、試合開始前から緊張気味の会話が交わされています。

宇都宮監督に率いられた本宿チームの選手たちは、最初、力率のよい攻撃をかけてきました。見る間に十三対十とリード

されてしまいました。

「何か、いやなムードになってきた。地区大会の二の舞にならなければいいが……。」

応援席から心配の声が聞こえた時、杉本監督・荒木コーチのタイムが要求され、選手たちが円陣を組みました。

「ここで流れを変えて一気にいこう。」

応援団のメガホンが一斉に「ガンバレ、ガンバレ上地」を呼び初めました。これを境に試合は急転回、あっという間に、二一対十三と逆転し、第一セットを手に入れました。

続く第二セットも、前半十三対七とリードを許しま

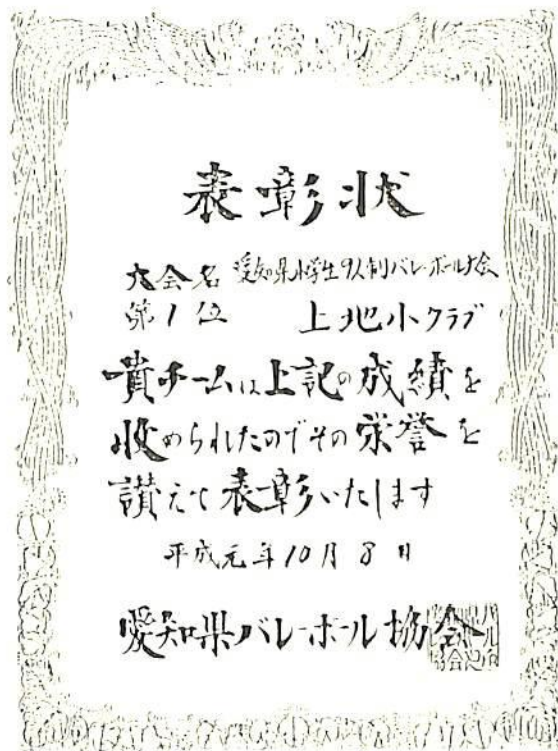
したが、次第に地力を発揮し二十一対十六で二セットをストレートで押え優勝を果たしました。午後四時五分、今年度公式戦の最後を優勝で飾った一瞬でした。

賞状と優勝盾を手にした十二名の選手たちの笑顔が、体育館の照明を浴びて輝いています。

「私たちの小学校バレーボール生活もあっという間に終わってしまいました。本当に短かったような気がします。これからは、五年生以下の後輩たちの練習を手伝い、中学校でもがんばっていきたいと思います。」

キャプテンの夏目さんが、汗をふきながら喜びを語ってくれました。

(松原 記)



七、なかよし池に流水装置

去る九月二十九日、なかよし池に待望の流水施設が出来ました。今回備えた水中ポンプは、毎分百三十リットルの強力な揚水能力があり、水面より約五十センチ上から斜めに落下するようにしたため、泡立ちも多く、水は絶えず循環するようになりました。

九月上旬の残暑続きのときに、大切な魚を酸素不足で死なせてしまい、落胆していました。そのころ、お孫さんと散歩にみえた学校東に住んでおられる「若松屋」さんが、悲しむ子供の姿を見て、この流水装置を御寄贈くださったものです。この装置のおかげで、魚たちは文字通りスーイスイと元気よく回遊するようになりました。ありがとうございます。

時を同じくして、上地三丁目の「鈴木昭男」さんから、四十センチもある色ゴイや金魚を十二匹も持ってきてくださいました。なかよし池が急に明るくなったようです。

先住民のマゴイとすぐに合流して、群れを作って泳いでいます。池をのぞいた子供たちも、池の中の島で群れと一緒に回遊しています。

「赤と白、まだらのゴイがいっぱい増えたよ。」

「ほくも、餌をやりたいから、飼育係になりたいな。」

なかよし池はますます子供たちの人气的になるでしょう。若松屋さん、鈴木昭男さんに厚く御礼申し上げます。

次の二ページには、なかよし池開設以来、池の住民になった魚たちの一覧です。自然界の厳しさでその増減はあるものの、流水装置の設置により、市民権をより確実にしました。

(長坂 記)

なかよし池の住民たち

NO2

児童名は持参した人の名です

月 日	さ か な	カメ ザリガニ おたまなど
18	金魚1	
19	コイ3 (50, 30, 20cm) おじさん コイ10 大きいブルーギル1 松田 南東、北東のスイレンの花が咲いた	アメリカザリガニ3 205 中原
20	コイ2 おじさん	
24	コイ1 おじさん	水量調節
26	金魚4 404 鈴木	ミズカマキリ 604 水田 佐藤、杉浦
8、 8		北のレンガの間にカメの卵が2つ産んであった。 403 田中 家で卵をかえすために持っていく 小川あ、小川た
9、 11	コイの名前を決めた ・ブラック ・シーラ ・ゴールド ・ホワイトブラック ・カンス ・ロッキー ・ラッキー	
16	この2、3日、30度を越える暑さが 続き、コイが酸素不足で死んだ。 ・ブラック ・ホワイトブラック ・ロッキー ・ラッキー	
18		かめ 池田
24	砂川でつかんだコイ (ドラゴン) 601 伊奈	かめ (スーパーガメラ) 401 海藤
27	フナ1 (砂川) 301 川野	
29	水中ポンプ取り付け (内海電気)	ホテイアオイ14 岡本先生
30	ハエ2 (砂川) 科学部	かめ 科学部
10、 3		一番小さいかめが死ぬ
4	フナ -1	
7	金魚1 色コイ5 503 鈴木 水中ポンプの改良	
8	色コイ6 503 鈴木	
11	コイ3 303 酒井	

なかよし池の住民たち

NO1

児童名は持参した人の名です

月 日	さ か な	カメ ザリガニ おたまなど
6、 13	ブルーギル2 502 松田、古瀬	
15		おたま1 食用おたま1 102 佐々木 おたま5 102 熊谷 大カメ1♀ 404 井戸田
17		
18	フナ約30	
19		おたま15 ザリガニ1 花田、松井
22		かめ1 503 鈴木、五味沢
28		かめ1 204 柴山
7、 3	『なかよし池・ここにこ橋の完工式』 コイ3 区画整理組合 畔柳文夫様	
5	ブルーギル -1	
6	金魚1 102 稲吉	10時35分 長細い、白い卵12個が、 ここにこ橋の南の水中に産んであった 発見 404 山本、尾上、三石 4時5分 カメがけがをしていた。下 の甲らがむけていた。池の中の植木の 葉がくさって無くなっていた。 同上三人
7		おたま約20 102 加藤
8		食用ガエルの親分1 603 前田
9	フナ7 205 内藤 602 鈴木	
10	フナ1匹とかえる1匹がけが	かめ1 404 本多 かめのたまご6個を土に埋めた。(南 の植え込みの深さ10cm
11	フナ -1 南西のスイレン白い花が咲く	
12	田中潮君が副委員長に タナゴ1 502 鈴木	かめの名前を決めた ・ピエール ・ももすけ ・ももこ ・チョッキー ・ジョンソン ・ダンボー ・カール
13	北西のスイレン白い花が咲く	

八、ベルマークが竹馬に

十月二十五日、上地小学校に竹馬が届きました。大、小それぞれ六組づつあります。早速、組み立ててみました。スチール製で持つところが赤、緑、青と鮮やかな色をしています。校長先生が、使いやすく整頓できるようにと、倉庫に棚を用意して下さいました。全校集会で紹介された竹馬は、その日から、人気のある遊びになっています。みんなの集めたベルマークが竹馬になったのです。

ベルマークを集め始めたのは、四年前。この夏、ベルマークが、段ボールの箱いっぱいになりました。第一回赤十字委員会では、ベルマークを整理することを今年度の取り組みの一つに入れることにしました。

月二回の委員会ではなかなか整理できません。夏休みにも二日出校して、整理しました。暑い日、窓を開けて風を入れたくても、ベルマークが風に飛ばされるということで開けられません。汗を流しながらの作業です。会社毎に仕分けをしていきました。一、二、三、四、・・・、得点を見ながら枚数を書き込んでいきます。赤十字委員の誰ひとり文句も言わず、黙々と整理する姿には感心しました。

このように整理したベルマークを送った結果、「上地小学校の貯金高は、五万九千三百九十四円です」という通知が、九月二十一日に教育設備助成会より届きました。これで、買い物ができます。赤十字委員会にこのことを報告すると、にっこり笑顔が返ってきました。

「さあ、何を買おうか？」と、いうことで、アンケートをとるようになりました。ボール、ミュージックベル、竹馬、鉛筆削り、黒板ふきクリーナー。この中から選ばれたものは、竹馬でした。

今日も、この竹馬に上地っ子が乗り、一、二、三、四、五と歩数を数えている声が聞こえます。上地の竹馬チャンピオンは誰になるのでしょうか？楽しみです。

「私たち赤十字委員は、ますますベルマークを集め、整理に励まねば・・・。」と、張り切っています。(守山 記)

九、ソニー教育論文で優良賞を受賞

十一月一日、ソニー教育振興財団から、うれしいニュースが入ってきました。夏休みに応募した教育論文が、優良賞に選ばれたものです。これは、上地小学校の児童が、心豊かに力いっぱい活動している姿を論文にしたものです。

受賞式は、十四日、本校の体育館で行なわれました。校長先生が賞状をいただいた後、近藤PTA会長さんには、ソニーカメラ一体型8ミリビデオ、8ミリビデオデッキ、二十五インチのテレビ受像機などの機器一式が渡されました。続いて、六年生の中西由香利さんが、児童を代表してルーベ（虫眼鏡）をいただきました。このルーベは、小さな世界を大きく見てほしいとの願いが込められた記念品です。児童全員にいただきました。

贈られた視聴覚機器は、理科・社会・体育などいろいろな教科で活用できるので大切に使用させていただきます。(大井 記)

賞状

岡崎市立 上地小学校 殿

同 PTA 殿

貴校は平成元年度ソニー教育資金
贈呈計画において慎重な審査の結果
優良校に選定されました
よつてこれを賞します

平成元年十一月一日

審査委員長

岩間 英之郎

財団法人ソニー教育振興財団

理事長

井深

大

十、文化祭のテーマは『あの子どこの子上地っ子』

上地っ子文化祭は、十二月九日（土）に開かれました。代表委員会で決まった今年の統一テーマは、「あの子 どこの子上地っ子」でことばの響きが良いのか、準備期間中にも各所で合言葉になって言われてきました。

全校児童九百三十三人が体育館に集まりました。いよいよ午前部の始まりです。司会の岩崎有里子さんと政木みゆきさんが開会を宣言しました。二人の軽快な語りは、息がぴったりとあっています。校長先生の「今日は上地っ子のお祭です。約束を守って楽しい文化祭にしましょう。」の挨拶の後は、学級発表の時間です。

第一回は三年一組です。雑壇に全員が並びました。よく見ると、田中佑樹君が真っ赤なセーターを着て、真っ赤な手袋をつけています。全員合唱です。題は『佑樹が背中を押してくる』。これは、国語で習った詩、『夕日が背中を押してくる』をもじったもので、

「夕日が背中を押してくる 真っ赤なうでで押してくる・・・(略)・・・さよなら さよなら ばんごはんが待ってるぞ あしたの朝 寝過ぎすな」

の元歌の、「夕日」を「佑樹」に置き換えて歌っています。舞台では、真っ赤な夕日の佑樹君が、体の大きな川野貴洋君の背中を両手で押しながら演技しています。たった三分の出し物でしたが、会場からは精いっぱい拍手がありました。

第二回は、三年二組の学級の歌の発表です。三年生でもハーモニーされたきれいな歌声です。プログラムは次々と進んでいきます。全クラスの出し物一覧を表で紹介します。

三の一	佑樹が背中を押してくる	二の一	二年一組 一番元気
二	三の二 クラスの歌	二	二年二組 二年二組 二年二組
三	おわらいしようかい	三	二年三組 ノリター大好き
四	三の四 ベスト3	四	二ノ四 仲良し
五	クラスのしようかい	五	二年五組 歌います
四の一	ファイトだ 四の一	五の一	ここに こうかいてあるから こうだ
二	ファイト 四の二	二	五年二組の仲間たち
三	ヤルゾ 四の三	三	五年三組 授業参観の巻
四	ある日の学級会	四	われら五の四 総勢四十人
一の一	ニンポウ ヘタラカ マルベチカ	六の一	ばくしよう 六の一
二	元気いっぱい 二組の子	二	おどって おどって 3000年
三	一年三組 ちびっ子にんじゃ	三	心のつばさ
四	えがおが いちばん 一年四組	四	きょうふの 修学旅行

演題にはクラスの特徴や担任の口癖を表現したものが多く、演技にも楽しいお祭りの雰囲気各所に出ています。プログラムに挟んで、司会の子がジャンケンゲームやだるまさんゲームなどを取り入れて気分転換を図ります。土曜日の児童集会在、児童会活動として自主的に運営されてきましたから、会場との呼吸もぴったりで進行して行きます。

午後の部は、上学年の学級がそれぞれ趣向を凝らしたコーナーの時間です。今年は、三年生の三組と五組も参加して、さらに盛り上がってきました。

一か月ほど前から、何を、どのように展示したり表現するのか、などについて学級会で話し合い、一週間ほど前から具体化してきました。クラスがひとつの目標に向かって行動を共にしてきた成果を、他のクラスの友達に示す時間です。教室をのぞいてみましょう。

六年一組は、二つの理科室を使って「人間すごろく」コーナーを開いています。入り口で、入場時刻を書き込んだ小さなカードと一辺が七センチほどのさいころをもらいます。廊下や室内には、番号が書かれた段ボールが飛び状に曲がりくねって置いてあります。さいころの目の数だけ進むことができますが、所々に係の子がいて難問を出します。十六番には小林さんが待ち構えていました。三か五の目が出たらクイズに答えなければなりません。低、中、高学年向けの三種類の問題が用意されているようです。(中学年向けの問題の例一口から飛び出す首は何でしょう)うまく答えられると次へ進めます。出来ない時間がかかってしまいます。うまく進んでも、四十番では佐々木さんが(歌を歌いましょう)とか、七十番では(うでたて十回)とか、終りのほうになると(五つ下がる)とか、十五下がる)などの番号もありました。もたついていると、後からスタートした子がどんどん追い越して行ってしまうます。一年生の子も五年生の子も同じように楽しんでます。河合先生も真剣になってさいころをふっています。ゴールの位置には、時間計算係、賞状渡し係、さいころ回収係の子が活躍しています。スタートして五分以内でゴールインすると、手作りの賞状とパン粘土で作った星座メダルがもらえます。さいころゲームをしている子が十五人くらい、スタート地点で順番を待っている子が二十人くらいはいらっしゃるでしょう。

係をやっている小浜君に聞くと、

「さいころゲームのために、いろいろな相談をしたり準備をするなかに意見の違いもあったけれど、こうして多くの子が楽しんでる様子を見ると、やってよかった。」

と、答えてくれました。

四階の図書室では、五年二組の「五の二 名作劇場」が上演されています。窓枠にプログラムが貼ってあります。一番は「光戦たいゴリラーマン」、

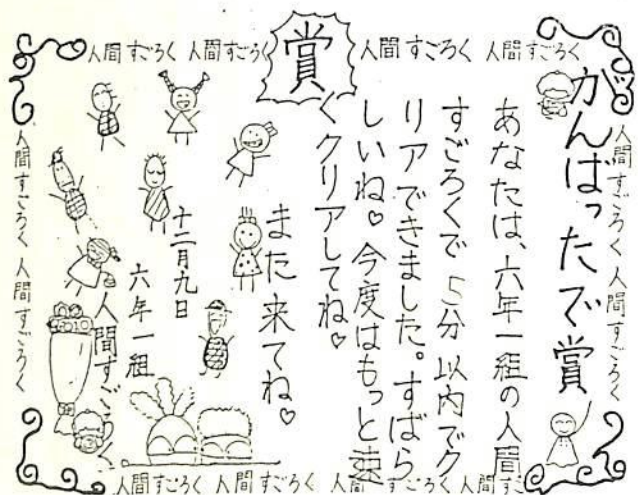
二番は「こわい話」、三番は「浦島バチ太郎」、四番は「まほう使いサリ」で、上演時間は、それぞれ二十分です。入り口では、小林君ら五人の男女が盛んに呼び込みをしています。

「今が一番面白いよ。さあ、よって行きな。」

「これが、最後の出し物、コマースャル入りの名作劇場だよ。さあ、いらっしやう。」

と、声を大に。そう言えば、どのクラスも、看板を立てたりチラシを配ったりして、宣伝には力を入れています。ガラス越しに中をのぞいて見ますと、舞台や幕まで用意されており、まさに劇場です。

三階の渡り廊下では、四年三組の「トリブルゲーム」が設置されています。うでずもうの相手はボール箱に入っていて、誰か分かりません。わなげコーナーもあります。ローラーゲームは、丈夫な筒をたくさん並べてあります。そこへヘッドスライディングして、うまくローラーに乗って目標の位置まで行けば合格になります。この装置は、土屋先生と学級の共同作品です。思い切って飛び込まないとなかなか合格になりません。でも、中嶋先生はみごと合格でした。



全部のコーナーを紹介するには、紙面が足りません。他のクラスの出し物を一覧にします。

三の三	おもしろゲーム館	三の五	おもしろゲームコーナー
四の一	君も挑戦しよう	四の二	スピードガン
四の四	暗闇メイロ	五の一	たんけんバケネコたいじ
五の三	五の三城	五の四	くらやみ五の四族
六の二	映画館	六の三	謎の宮殿
六の四	人体メイロ		

今年の出し物の中には、段ボールで迷路を作ったり、暗室にして肝試しのような企画をする学級が多くありました。そのた

め、授業後、近くの商店や事務所へもらいに行ったり、段ボールを下げながらの登校姿がありました。交通安全や下校が遅れるなどの問題も心配されましたが、子供たちは注意しながら運んでくれました。教頭先生が、野畑ふとん屋さんや学区外のカーマホームセンター、教育産業、ヘルシーメイトさんなどへもお願いし、トラックで運んできました。なかには、わざわざ運んで下さった方もあります。

また、自分たちのコーナーに大勢参加してもらえよう、前日からブラカードで宣伝したり、呼び掛けのチラシを印刷して配ったり、午前の部の学級紹介で午後の出し物を取り込んだりしていました。自分たちから積極的に立ち向かって行く様子が見られました。五年一組では、入場者の人数までチェックしていました。三百枚の小さな賞状カードも無くなってしまい、急ぎよ二百枚の増刷りをしましたが、それも残り少なくなっていました。

上地っ子の遊びのお祭も盛会のうちに終り、普段の上地小に戻りました。来年が待たれます。

(大井 記)

十一、校舎増築を盛大に祝う

◆ 中根岡崎市長を迎えて完工工式 ◆

昨年の六月中旬から工事にかかった特別教室(図工室・家庭科室)と普通教室(六室)が完成し、一月十日、完工式が行なわれました。

市役所の関係者、教育委員会の先生、学区諸団体の方、PTAの皆さん方を来賓にお迎えし、式は定刻に始まりました。初めに、中根岡崎市長さんから「開校以来七年間、新しい学校に新しい伝統、素晴らしい伝統を作ろうと児童の皆さんや先生方が一体となって努力してきた。それが実を結んだことは、それを取り巻いてくれた友達や学区の皆さんの応援があったからこそです。これからも素晴らしい学校作りに励んでほしい。」との式辞をいただきました。

八田市議会副議長さんから、「新しい校舎をフルに活用して下さい」。前川教育委員長さんからは、「上地の発展は、三十万都市岡崎の発展のもとになっている。さらに飛躍して下さい。」の励ましの言葉をいただきました。

続いて、「このような立派な施設を作っていた関係各位に感謝するとともに、このうちは、施設設備の活用とあいまって、健やかな育成に精進していきたい。」との、校長の謝辞がありました。続いて、児童を代表して六年生の満瀬夕季さんが喜びの言葉を述べました。

喜びの言葉

待ちに待った校舎の増築がやっと終わりました。普通教室が六つと家庭科室・図工室が真冬の太陽を浴びて

輝いています。

上地小学校開校の七年前は、わずか五百八十人、十五学級でしたが、今では九百三十四人、二十六学級の学校になりました。完成した特別教室の入り口には、河合友子先生と中嶋ゆかり先生が原画を描いて下さった「壁画」コーナーもあります。一目見ただけで胸がわくわくしてきます。エプロンをかけてすぐにも料理実習がしたくなりました。工作台の上で思い切り金槌を使ってみたくになりました。上地っ子の気持はうれしさでいっぱいです。工事が続いた七か月間、鉄と鉄がぶつかり合う音で先生の声がよく聞こえなかつたりして困ったこともありましたが、完成した立派な校舎を見上げると、そんなことは忘れてしまいます。完成した真っ白な校舎が七年前の校舎の壁と色の違いをくっきりと浮び上がらせています。私達六年生にとっては、一日も早く家庭科室と図工室で実習できることを楽しみにしています。

私達は本当に幸せです。中根市長さんを始め市役所の皆様、都築市議会議長さんを始め市議会の皆様、上地学区の皆様、工事をして下さった皆様本当にありがとうございます。上地っ子は、校訓「力いっぱい」の心でこれからもがんばっていくことをお誓いしてお礼と喜びの言葉といたします。

平成二年一月十日

児童代表 満淵 夕季

来賓として出席していただいた渡辺市議會議員から、「児童の皆さんが日頃、勉強や運動をしっかりとやっているから、市当局は校舎建設の陳情を快く受けていただいた。後輩に受け継いでいってほしい。」終わりに、成瀬総代会長さんから、「レハブ教室の勉強もやがてはいい思い出になることでしょう。」の祝辞をいただきました。

新しい教室は、六年四組の家庭科「おやつ作り」でこけら落としが行なわれました。

(大井 記)

十二、健脚競うマラソン大会

走った後はおしるこ五杯の子も

校内マラソン大会は、一月十三日(土)行なわれました。朝のうちは温かな陽気でしたが、次第に風を伴う寒さが加わり、「寒の行軍」にふさわしくなってきました。

一年生が運動場に整列したところで、校内放送による、校長先生の、「寒さに負けずに、自分の力を出しきって走りましょう。」というはげましの言葉を聞きました。

準備運動が終わると、いよいよスタートです。初めに、男子がスタートラインにつきました。六十五人もが並ぶと壮観な姿です。鈴木先生の号砲でいっせいにスタートしました。直線コースで全力疾走をしたので、運動場を出る頃にはバテバテになつてしまった子もいます。でも、集団となって南門へ消えていきました。校外では、体育委員のお母さんが交通整理をして下さっているので安心して走れます。しばらくすると、正門から、加藤くんや壁谷くんたちの姿が一团となって現われました。ピッチは少しも落ちていません。再び運動場に入ってから、なお一周します。どんどん運動場に入ってきましたが、中には、応援のお母さんの姿を探しながら横を向いて走っている子もいます。一着はわずかの差で加藤君が入りました。一年生が走った距離は約八百メートルでした。

一年女子、続いて二年男子とプログラムは進んでいきました。走り終えた学年から、学級委員さんや地域委員さん、役員さん達が愛情をこめて作って下さったおしるこをいただきました。十三個のはそりにいっぱいあった白玉入りおしるこも、またたく間に残り少なくなりました。全員完走し、おいしいおしるこもいただいて満腹した一日でした。

(大井 記)

十三、中庭の築山は人の山

南校舎と北校舎の間に、高さ四M、周囲の長さ約三十Mの築山ができました。

これは、このほど完成した普通教室の増築工事によって出た残土を、円錐形に高く盛り上げたものであり、ちょっとした山登り気分を味わうことができます。

放課になると、二年生や三年生が真っ先に走ってきて、頂上を目指します。そこに立って西の方を眺めると、上地一区の方までも見渡すことができます。

二十人くらいが登っているでしょうか。すべるのでうまく足が進みません。助け合って登ろうとしている子。ふざけあっておにごっこをしている子。すべてころんでお尻を泥で汚してしまった子。シャベルやスコップなどの道具を使うことは、まだ許されていませんから、いくら走り回っても山は小さくなりません。

近ごろ、雨の日が多くありますが、止むと、われ先に駆けてきます。ズボンの尻を泥だらけにして家路につきますが、お母さんからどんな言葉をいただくのでしょうか。

なお、一月末には、同じ中庭にコンビネーション遊具が完成します。上地っ子の楽しみがますます増えていきます。

はじめに土の山にのぼるとき、おとされないうかどキドキしてたよ。かなこちゃんとのぼってはじめはたいらになっているところにとまって、すぐにおりていったよ。それで、ゆかちゃんとほんたいがわからないのぼったら、ちようじょうまでのぼれたよ。おりるときにちょっとこわかったから、ゆっくりおりていって下のほうへいったら、走っておりていったよ。二回目にはのぼったときは、自分でのぼったよ。

(二年 中村 里沙)

(大井 記)

十四、学校給食試食会に四十五名の参加

～完成した家庭科室で開催～

二月二十一日(水)の午前十一時三十分、エプロンを手にしたお母さんたちが次々と家庭科室に集まり始めました。

「学校の給食なんて、この頃は子どもから話には聞くけど実際は知らないのだから楽しみにやってきました。」

「ええ、でも私たちの子どもの頃と比べて随分美味しくなっちゃって聞くけど……。」

室内に用意されたストロップの火を囲んで、早速給食談議に花が咲いています。PTA役員さんの受付でこの日の「給食費」百七十五円を支払っては、三角巾やエプロンを身につけています。

「じゃあ、川尻給食主任さんからお話を聞きましょう。」

給食のきまり

- 1、つめを切る。トイレへ行く。はなをかむ。
- 2、エプロン、ぼうし、マスクをつける。
- 3、きめられた方法で手を洗う。
- 4、廊下にならび、配膳室まで順序よく行く。
持ってくるもの 食器かご3人・食缶2人・パン(ごはん)箱2人・添加物2人・牛乳2人
- 5、順序よくとる。並んで教室まで運ぶ。

- 6、運んだものは、配膳台の上におく。
7、こぼさないように公平に早く分ける。

給食当番に仕事の説明が行なわれた後では、昨年十一月に本校で実施された二十種類中の好き嫌い調査の結果が紹介されました。(一)内は、当日出席されたお母さんたちのアンケート結果です。

● 好ききバスター5

- | | |
|---------------------|------------------|
| ① やきそば(ごもくきんびら) | ① 抹茶ムース(カレーシチュー) |
| ② カレーシチュー(ひじきのいために) | ② ツナサラダ(みに) |
| ③ コーンシチュー(やきそば) | ③ ごもくきんびら(抹茶ムース) |
| ④ ハンバーグ(みそにこみうどん) | ④ みそに(ぶたじる) |
| ⑤ コロッケ(ぎょうざ) | ⑤ ぶたじる(マーボ豆腐) |

▲ 嫌いバスター5

さて、なごやかな雰囲気の中で進んだこの日の南部給食センターの献立を記しておきましょう。

- | | | | |
|------|-------------|-------|--------------------------|
| 主食 | ごはん | 参考 | |
| 牛乳 | 一本 | エネルギー | 六九三カロリー |
| おかず | 石狩り汁・ほたてフライ | 蛋白質 | 二一九・三グラム |
| デザート | 夕張メロンゼリー | | 北海道の郷土食と特産物を取り入れたメニューです。 |

その他 こんぶのつくだに

初めての試食会とあつて、やや準備に手間取り二十分程かかってしまいましたが、さすがに食べ出せば母親。「なかなか、いい味ですね。」

「今の子どもたちは幸せですね。」

会話ははずみ、楽しいひとときが午後一時過ぎまで続きました。以下、出席されたお母さんから後日頂いた声のいくつかを紹介します。

- ・ 学校給食に負けないよう、おふくろの味、母親の手料理の腕をみがいかなければと思いました。(吉本みどりさん)
- ・ 今後、全員のお母さんが参加できるように、新しい家庭科室の活用を含め一年間かけてでも試食会を開けたらいいと思います。懇談会にもなるでしょうから。(佐野昌子さん)

・ 見知らぬお母さんたちともお友達になって楽しく食べられました。ぜひこれからもこのような機会をお願いします。(藤岡洋子さん)

・ 牛乳の味もごはんの固さもちょうどよく、薄味なおかずも中身といい量といい満足できました。(杉浦忍さん)

・ 職員室の先生が子どもたちより前に試食し、「毒味」までして下さることが分かり、安心します。(塚本秀子さん)

・ この次は実際に子どもたちが教室で食べているところを見せて頂けたら楽しいなと思っています。(鈴木和子さん)

・ 十数年ぶりの給食、とても美味しく頂きました。栄養のバランスや子ども達の嗜好など関係者の皆様の配慮に感心しました。(加藤寛子さん)

・ 食事の内容だけでなく、食器や食べる量も分かり、とってもいい勉強になりました。参加してよかったと思います。(安田由美子さん)

・夏の牛乳は冷たくても美味しいですが、冬は温かくして下さると体も暖まっていいと思います。(中村正美さん)

・石狩汁をいただきながら、昔の小学校時代を思い出し、おしゃべりに花が咲き楽しいひとときでした。(深水恵子さん)

・やさしい味付けで美味しく、しかも量も適当で栄養価も高過ぎず低過ぎず、よく考えられていました。(丸林恭子さん)

・一年生から六年生までのお母さんたちと一緒に給食がいただけでとても楽しい時間が過ごせました。(鈴木由美さん)

・野菜の量や切り方が子どもには、ちょうどよいと思いました。味も大変工夫してあり感心しました。(橋下清美さん)

・飽食の世の中です。与えられた物を食べるだけでなく自分の手で調理するなど、もう一工夫するのも如何でしょうか。(中塚るりさん)

・昆布のつくだに・デザート・メロンの香り一杯の夕張メロンゼリーと食品のバランスもよく味量ともにこれならと思える結構な給食でした。(西田由紀子さん)

・低料金でここまでの献立を考えられるご苦労は大変ですね。今後も心のこもった献立をお願いします。(佐藤妙子さん)

・「ほたてフライおいしかったね」と帰宅後の子どもと話ができてとても良かったと喜んでいきます。(村上正美さん)

・もし、お願いできるなら、ごはんの時だけでもお茶があったらなと思いましたが如何でしょうか。(森ゆき枝さん)

・特にデザートが美味しかったですね。将来、食器も割れにくい瀬戸物になるといいですね。これからもぜひこういう機会をもつて下さい。(赤堀明子さん)

・木のお箸はとても持ちやすく家庭的で、しかも、献立に合わせてスプーンと箸を使い分けるなどの気配りはよいことだと思いました。(阿知波京子さん)

・石鹸で手を洗い、次に消毒液を手にまんべんなくつけ自然乾燥させてから配膳しているということが分かり、家庭以上だと関心させられました。(平岩昭江さん)

・思っていたより薄味で、濃い味に慣れている私には健康面から考えて反省させられました。センター方式の衛生的な努力や気配りにも感心しました。(酒井富美子さん)

・メニューもバラエティーに富んでいて、とても美味しく頂きました。これを機にこうした場をもつと殖やしていただけたらと思いました。(内藤久子さん)

・第一にとて衛生的、そして第二に献立が家庭的だと思いました。それから、一番気になっていた人工着色料や甘味料などが使われていなかったことです。安心して帰りました。(松永道子さん)

・二十年振りに食べた学校給食は大変美味しくレヘルアップしていることに驚きました。牛乳と主食のごはんが思ってたより美味しく、私にはとても新鮮さを感じました。(横手ひろ子さん)

・おかずもとても美味しくできていました。牛乳がいつもついているのはいいですが、食後にはお茶でさっぱりしたいような気も致しました。(石川さん)

・「今の給食はおいしいよ、色々なおかずもついているよ」と子どもから聞いていましたが、全くその通りでした。満腹感もあり量も適当だと思いました。(近藤久美子さん)

・今の子どもたちは牛乳にごはんに箸と、とても恵まれていると思います。私達の子どもの頃は脱脂粉乳にパン、それから先割れスプーンでしたから。季節の果物まであるのですからいいですね。(関口美衣さん)

・全部平らげたら、お腹がいっぱいになってしまいました。高学年用の量だったのででしょうか。栄養面といい量といいよく考えられています。(中野志信さん)

・以前は大阪にいましたが、比べてみますと、米飯給食が多くて、器も可愛らしく、美味しくできていました。こういう機会をこれからももつて下さい。(荒島佳子さん)

・北海道の郷土料理をありがとうございました。薄味で塩分を取り過ぎないように調理してあるんですね。ゼリーがとっても美味しかったです。

(松田澄子さん)

・衛生面ではとても気を使っていたっていて、これなら安心だと思えました。メニューも私達の子どもの頃と比べてよく考えられていると思えました。

(三宅寿美さん)

・カロリーや栄養面では問題がないと思えました。主食のごはんやパンにもおかずとして、焼きそばやスパゲティーがつくのはどんなものでしょうか。

(無記名の方)

・少額の費用で栄養のバランスや好みまで考え合わせられていて、皆様の努力に感謝するとともに、今後も楽しい学校給食をお願い致します。

(斉藤順子さん)

・試食会に出席できて喜んでいきます。とても美味しかったです。給食当番の清潔面に徹底した指導がされていることにびっくりしました。

(本多泉さん)



お母さんによる会食風景

五、寄稿